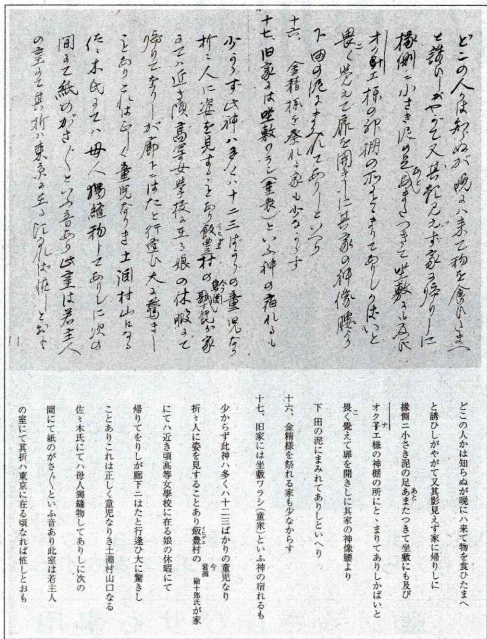


遠野物語「原本」刊行

自筆草稿と原稿
初版校正刷り
初めて1冊に

民俗学者・柳田国男(1875~1962年)の代表作『遠野物語』の自筆草稿や、初版の原稿などを収録した『柳田国男自筆 原本遠野物語』が岩波書店から刊行され



柳田による毛筆の草稿(上半分)と翻刻を対比して掲載

た。日本民俗学の礎とされる同書の成立過程を知る上で重要な成果だ。

3点を1冊にまとめた。柳田の研究者らが編集委員を務め、3点の写真や翻刻などを掲載している。

流麗な毛筆の草稿は、「坐敷ワラシ」や「河童」など、民話に聞き入る柳田の知的興奮を伝える。草稿には鉛筆で加筆・修正した跡もあり、編集した三浦佑之・千葉大名誉教授は、佐々木の書き込みと指摘する。柳田が参照したとされる佐々木の直筆メモも今回、収録した。

1910年刊行の遠野物語は、小説家志望で、岩手・遠野地方から上京した佐々木喜善が話した土地の民話の聞き書きを基としている。柳田はその時の草稿、書籍化を目指して清書した原稿、初版の校正刷りの「3点を「原本」と呼んだ。3点は後に柳田に共鳴した元衆議院議員の池上隆祐に贈られ、現在は遠野市の指定有形文化財となっている。

『原本』は、研究資料としての利便性を考え、初めて

者)の佐々木の綿密なやりとりが、遠野物語の土台になっている」と解説する。草稿と初版本を比較すると、柳田の推敲の過程もわかる。例えば、姉から花を横取りした「夢」を見た娘が一番良い山を手に入れた物語は、草稿では夢ではなく実際に姉から花を盗んだ話だった。三浦氏は「夢の話にしたのは盗みを犯した人が得をするのはおかしい」と柳田の道徳観があったのではと分析する。

遠野物語は、三島由紀夫ら文豪に文学性も高く評価された。三浦氏は「3点の比較分析を通じて、遠野物語の新たな魅力を見せる多様な研究が行われることを期待したい」と話している。

『原本』は、研究資料としての利便性を考え、初めて

(文化部 多可政史)